

みほどの、後はお任せします！

扉 行広

「あいてて、なんだってんですか、もう。……あれっ？」

ぶつけた頭をさすりながら秋山優花里が身を起こすと、そこは見覚えのない場所だった。埃と排水の匂いがする薄暗い鋼鉄の廊下。少し先にドアの開いたエレベーター。切れかけた天井の蛍光灯がジージーばかりと点滅している。

優花里のリュックが口を開けて転がり、パーナーやコッヘルやペットボトルや携行食が散らばっている。それをかき集めていた西住みほが振り向いて、「気が付いた？」と駆け寄ってきた。

「頭、どう？ ゴンツて音がしたよ。気持ち悪かったりしない？ どこか痛いとは？」

「待ってください、うー……」後頭部をさすると、こぶになっていたが、たいしたことはないみたいだ。「たぶん大丈夫です。みほどのは？」

「私は大丈夫、ちよっとお尻を打っただけ」  
スカートのお尻をぼんぼん叩いて微笑む。あは、と笑って優花里は尋ねた。

「何がどうなったんですか。たしか私たち、下りのエレベーターに乗って……」

「そう。それが急にひゅーって落ちこちたの。ガリガリすごい音がして、どすんって下に着いて、ここに放り出されちゃった」

「あー……そうでした」気味の悪いフワツとした落下感を思い出して、優花里はぶるっと身を震わせる。「きつとワイヤーが切れたんですね。

それで、一番下の緊急緩衝装置で助かったんです」  
「怖かったよ、死ぬかと思った。優花里さんは気絶しちゃうし……無事でよかった！」

みほが泣きそうな顔でぎゅっと抱き着いた。「あわ、その」と優花里はうろたえたが、二人はもう、ただの友達ではない。二年生の秋に思いを伝えあって、お互いがいちばん大事な間柄になっていた。

「私も、みほどのが無事で、ほっとしました」

腕を回して、互いの感触を確かめた。

「それにしてもここはどこなんだろうね。見たことないですけど」

「ずいぶん落ちたよ。エレベーター乗ったところもけっこう深かったし」

立ち上がった辺りを調べると、壁にかけられた案内板が見つかった。

《大洗女子学園高等学校学園艦 B 51、41F 地区》

「B 51って……」「地下五十一層、ですよ」

二人は目を丸くして顔を見合わせた。

「ほぼ艦底まで落ちちゃったわけですか！」「みたいだね、あはは……」

「すみません、私がこんな古いエレベーターに乗ってみようって言ったばかりに」

「優花里さんのせいじゃないよ、私が面白がって乗ったから……」

「まあ、上から探すか下から探すかの違いですけどね。たいしたケガもありませんでしたし」

「ん……そうだね。元気出さなきゃ。あ、ラムネあるよ！」

駄菓子を食べてから、散らばった荷物をかき集めて支度を整える。二人とも制服にリュックをしょってヘッドライトをかぶった完全装備だ。準備ができるとうなずきあった。

「それじゃ、改めて戦車探しの旅に」

「うん、パンツァー・フォー！」

戦車探し。それが、二人のこの小旅行の目当てだった。

先週行われた大洗女子と他校との親善試合。善戦したのだが、敵の動きを見誤って、フラッグ車がやられてしまった。チームのみんなは落ちこみ、元生徒会広報の河嶋桃が、とつくに引退しているのに、例によって偉ぶって命令した。西住、なんとかしら、と。

そこで優花里が提案したのが、まだ学園艦のどこかに眠っているかもしれない戦車を、もう一両見つけ出すことだった。新しい戦車が手に入れば、みんなもやる気を出すだろう。

私が命じられた任務だから、とみほは一人で行くとしたが、優花里がそれを許すわけがなかった。「みほどのが行かれるのなら、不肖・この秋山優花里も一緒にします！」

それでこの週末、日帰りハイキングの準備を整えて、学園艦の艦内へ降りて来たのだ。

「ゆきーのしんぐんこおりをふんでー」

「ドーこがかーわやら道さえしれーずーう」  
「あつ、ここは雪道じゃないですね。海行かば、にしますか？」  
「あれはちよつと……あ、次の階段があるよ。こつち！」

陽気に歌ったり苦笑したりしながら、みほの先導で鉄階段を登っている。学園艦の内部は巨大な迷路だ。市街地甲板は全長七キロ半、幅九百メートルに及び、ブロック構造で作られた高さ五百メートル近い艦内は五十階層以上に分かれている。複数の艦内商店街や食堂街、倉庫が点在し、無数の通路や換気口、排水路、階段やエレベーターが縦横に走っている。

人口の減った現在では、それらの街区の大部分は放棄されて、朽ち果てるに任されている。真つ暗な通路の奥にねずみの目だけが光る不気味な空間だが、元氣いっばいの女子高生二人は氣にもせずに歩いて行った。  
「五九八、五九九、六〇〇段つと！ふう、優花里さん、もう二〇層も登ったよ」

「どれどれ……B 31層。そうですね、間違いないです。ここらで少し水平移動しません？登ってばかりですし」

「それよりお昼にしようよ。疲れたよ」

「あはは、そうしましょうか。ずいぶんがんばりましたしね」  
階段の踊り場にシートを広げて腰を下ろし、それぞれのリュックからお弁当を取り出す。優花里はお握り、みほはサンドイッチだ。「多めに作ってきたから、ちよつとずつ交換しない？」「いいですねー」と手渡しする。

「いただきます……あれ、おかかだ。優花里さん、梅干しにするって言ってなかったっけ？」

「えー、言いましたっけ？」

「言った。すっぱいの苦手だから練習するって、このあいだ」

「んー、そうでしたっけ？覚えがないな、フッフフーン」

「とぼけちゃって」肩を小突いてから、みほは面白そうな目で見つめる。  
「優花里さん、ずいぶんくだけてきたね」

「え、そうですか」言われた優花里はちよつと頬を赤らめる。「なれなれしすぎますか？」

「ううん、全然。そのほうがずっといいよ、楽しい。西住どの！って言ったところも面白かったけど、みほののって呼んでくれるようになったの、ちよつと嬉しい」

「えへへ、そう言ってくださるとやりやすいです……なんかこう、どのを外すのだけは照れくさくって」

「いいよ、それで。優花里さんだけ、特別」

肩を並べて食べていると食が進んだ。二人とも多めに作ってきたので、最後にお握りとサンドが一つずつ残ったが、「取っときますか？先は長そうですし」「ううん、私は食べちゃう」みほはきれいに平らげました。

「ふう、おなかいっぱい。ごちそうさま！」

「じゃ、行きましょうか」

優花里は残ったお握りをしまいこんで、立ち上がった。

午後は横方向にも歩いて戦車を探し回ったが、事前に何か手掛かりがあったわけでもなく、さっぱり見つからなかった。その代わりに、艦上のどこからか鏡で光が通されているらしい、ぼつかりと明るい公園にたどり着いて、ブランコや滑り台でついつい遊んでしまったり、ちよつとした問題が発生して——昔トイレだった場所か、さもなくばこれからトイレにしてもいい場所が、必要になったのだ——時間を使ったりしてしまった。

学園艦の外の海に太陽が沈むころ、遅れを取り戻そうと二人は急いで階段を駆け登った。第二〇層、第一〇層を通り過ぎ、第六層にさしかかったところで行く手をはばまれた。

「行き止まりだ」

第五層の踊り場に出るはずの場所に、後から設置したらしいベニヤの板壁が作られていた。二人はいったん第六層に戻ってフロアを歩き回ってみた。どこも同じだった。東西南北百メートルほどのフロアにある、すべての階段は板壁に塞がれていた。それだけでなく、隣接フロアへつながる水平通路も、鉄扉が閉ざされて施錠されていた。

「袋のネズミってやつみたい。これ……上に出入れないってことかな？」

「の、ようですね」

明かりのない真つ暗な階段で、ヘッドライトの光の輪が殺風景な板壁を照らし出す。赤錆に覆われた太釘の先が何本も突き出している。向こうから打ちつけられているのだ。

「閉じ込められちゃった」

みほの足元に、壁にテープ留めされていた古い貼り紙が、ひらりと舞い落ちた。

コーツ、と静かな音を立ててケロシンバーナーが青い炎を上げている。コッヘルの蓋を開けた優花里の顔を、白い湯気がふわりと覆った。

「加熱できましたよ」

「ん、ありがと」

「とつときのレーションです。デザートとチョコバーとオレンジジュースもありますよ」

「すごい。優花里さんのカバンって——まるで魔法のカバンだね。なんでも出てくる」

「リンゴが一個に、飴玉が二つ——ですか？ ふふ、残念ながらそれはないですね」

「あは……」

カンティーンに盛った湯気の立つレトルトを受け取って、保温シートにくるまったみほは弱々しく微笑んだ。シートも、床に置かれた地図やコンパスも、全部優花里の道具だ。

「優花里さんがいてくれて、ほんとによかった」

「私はいっただってみほどののそばにいますよ」

「うん、ありがとう。でもごめんね、優花里さんに道案内してもらえばよかったね」

「私がやっても間違えましたって、こんなややこしいところ。気にしないでください！」

落ち込んでいるみほに、優花里がつとめて明るい声をかけた。

野営を決意したのは、ここが封鎖ブロックだとわかったからだ。

ブロック構造とは、大型艦を建造するやり方の一つだ。縦横数十メートルの箱をいくつも作って、溶接で組み上げていく。学園艦もその方法で作られたが、何しろ巨大だからブロック一つ一つも桁外れに大きい。またその数も多く、歳月が経って人が減ってくると、メンテナンスの手が回らなくなってきた。

そこで、艦を管理していた誰かが、無人になったブロックを封鎖することにしたのだ。中にいる人間を閉じ込めるためではなく、上から降りていく人間が入らないように、だ。

「まさかこのブロック全体が、行き止まりになってるなんて思わなかったよ……」

「私も初耳でした。誰でもそうですよ。だからこんな紙が貼ってあったわけで」

優花里が、ベニヤ壁から拾ってきた貼り紙をひらひらさせる。封鎖ブロックのことがわかったのはその紙のおかげだった。間違っただからこの場所に迷い込んだ者——まさにみほたちのような人間——に封鎖の理由を説明したもので、この近くに出口はないから、いったん艦底まで戻って隣接ブロックへ移るように、と地図が書かれていた。

それにしても、五百メートルをもう一度降りて登るのは大変だ。だから今日は休んで、明日また行動することにしたのだった。

「優花里さんのご両親にも心配かけちゃったし……」

「うちの親は慣れてますって」優花里がスマホを振る。「一日ぐらい外泊しても、またキャンプ？ ぐらいのもんです。市街地のすぐ下だって教えたから、心配もしてません」

「でも、それ嘘でしょ。すぐ下って言っても、出られない牢屋みたいな場所……」

艦底まで降りれば出られますって！ サメさんチームの人たちがいたじゃないですか。きつと明日には会えますよ。ドンゾコで何か飲ませてもらいましょ」

「優花里さん……」みほはレトルトにスプーンを置いて目を伏せる。

「優花里さんはいいつも優しいね。私なんか失敗ばかりなのに。サンダーズとの試合でも、プラウダのときも大学選抜の時も、だまされたりみんなを説得できなかったり……それに先週も」

「みほどの」

優花里が苦笑して、みほの頬を両手で挟んだ。「ふえっ？」と上げた目を、覗きこむ。

「そういうのは、ナシです！ みほどのはいつもがんばってやってるんですから、それで十分ですよ！」

「優花里さん……」目を丸くしたみほが、「そうかな」と小さく笑った。

「そうですね」

食事を終えると、優花里がみほを寝かせて寄り添い、保温シートをかぶった。襟元から甘い潮風のような汗の匂いがして、みほは自分たちの状態に気づく。

「あつ、だめ。私いま、汗くさいよ……」

「すみません、私は気にしません。体温を保つほうが大事です！ ……みほどの、気になります？ 私の」

「——ううん、気にしない」

首を振って、みほは温かな優花里の肩に寄り添い、ふわふわの髪に顔をうずめる。

「おやすみ、優花里さん……」「おやすみなさい、みほどの」

大丈夫、とみほは自分に言い聞かせる。この人と一緒なら、私はやっていける。

眠りに落ちる直前、ぐらりと二人を囲む世界が大きく揺れた。

「ここもかー！」

昨日見たのと同じ貼り紙を目にして、優花里が天を仰いだ。熱気を孕んだ蒸気がもうもうと立ち込める広大な部屋だ。オレンジ色の整備灯が天井で輝いている。壁面に作り付けられた長い長い折り返しの鉄階段を、苦勞して何千段も登り詰めたが、待っていたのは施錠された頑丈な鉄扉だった。

「まーた無駄足ですよ、きついですね」

優花里ががつくりと膝に手をつけて、はあはあと肩で息をする。赤らんだ頬を伝った汗が、顎からぼたぼたとしたたり落ちる。

「さすがにね、ふう……」

みほも疲れ切っており、通路の片側の鉄柵にぐったりと身を預けた。手すりの外にはドーム球場が丸ごと入りそうなどてつもない空間が広がっている。噴き出す蒸気の底にうずくまっている巨大な影は、学園艦の動力炉だ。ごうごうと低い音が響いている。

落胆しつつ、眼下の光景に目を凝らした。自動運転らしく、人影はない。沸き返る蒸気の切れ目から、壁沿いのキャットウォークの先が見えた。他にも登り階段があるようだ。

優花里がどきりとへたりこんだ。

「すみません……こんな重要区画、立ち入り禁止、予想できたのに……」

「そんなのわからなかったって。——優花里さん、優花里さん？ 大丈夫？」

ふらつきながら近づいて、優花里の頬に手を当てた。熱い。今日は朝から彼女がコンパス片手に道を決め、先に立ってがんばっていた。リュックも彼女のほうがずつと大きい。

「休憩しよう。飲み物出せる？ かぼんの奥？ 私のを」

ペットボトルのジュースは昨日とつくに飲み尽くした。水筒に残っていたお茶をカップに注いで、優花里の口元に当てる。ごくりと一口飲んだものの、「大丈夫です——あとは、みほどのが」と、手を押し戻して、口元をぬぐった。

「わかたぬ、もらうね。それと荷物見るよ、いい？」

持ち前の冷静さが頭をもたげていた。みほは二人の物資を取り出して残りを確認する。優花里のカロリーメイトが二本と、みほのラムネ菓子が少し。レーションのたぐいは今朝食べ切った。水は二人とも水筒の底でちやぶちやぶ鳴るぐらい。

「食べ物はなくともしばらく持つはず。水が最優先だね、水道を探そう。さ、優花里さん」

「はい……」

「優花里さん！ ほら、ラムネあげる。もう少しがんばろ？」

甘い駄菓子を手のひらに出し、ひとつつまんで口に入れた。かりかりと噛んだ優花里が、夢から醒めたように瞬きした。

「は、はい。行きましょう！」

壁の中腹にある合流点まで階段を下りて、キャットウォークに移る。壁の対岸に渡って、そこからまた登ったが、頂上の扉はまたしても閉ざされていた。二人は肩を落とす。

「上に電話して、開けてもらおうか？」

「騒ぎになっちゃいますよ。きつと怒られます」

「そうだね……また艦底からやり直した。でも優花里さん、いける？」

「なんとか。ドンゾコがまだですしね。挨拶ぐらいしてこないと」

優花里は笑顔を見せたが、あごの隅が引きつっていた。かなりこたえている。見ていられず、「リュック貸して、交換しよう。重いで

しょ？」と強引に荷物を取り換えた。

数百段を下って、開いている扉を見つければ、隣のブロックに移った。これだけは譲れないとばかりに優花里が先頭に立つ。コンパス片手に地図をにらんで、「こつち……はい、こつちです！」と道を選ぶ。どこも同じようで見分けのつかない、入り組んだ鉄の通路を進んでいく。

航海科の艦底組が住み着いたあのエリアには、行き当らなかった。学園艦の広さに比べれば、ほんの小さなものでしかないらしい。その代わりに、また新しい階段を見つけた。今度こそ↑露天甲板≒と案内板が出ている。

「ここだね、優花里さん」 「ええ、そう書いてありますけど……うん？」 「ここだって。違ってもいいよ、出られれば。さ、登ろう！」

「そうですね、はい」

その螺旋階段は当たりのように見えた。それまでの薄暗い整備用の鉄階段ではなくて市民用で、中央の吹き抜けから上方を仰ぐと、遠くに明るい光が見えた。

「ほら、空が見える！」

みほが指差すと、気がかりそうに床を見ていた優花里も、つられたようにうなずいた。

再び、一千段以上の登り——といっても、さすがにもう疲れすぎて段数は数えられなかった。息が切れて喉が痛み、汗でべたついた服が肌に貼りつく。リュックを背負った肩が痛み、腕がしびれたようになってくる。太腿もふくらはぎもパンパンに張って、一歩踏み出すたびに膝と足の裏が痛んだ。

それでも、徐々に近づいてくる吹き抜けの明かりが救いになった。閉

じられた各層の扉をいくつも通り過ぎながら、二人は手をつないで励まし合った。

「優花里、さん！ ほらラムネ食べて！ もうちよっと、あと十層！」

「はは、なんか、登山映画みたいですね。登ったら、旗でも、立てますか」

「白旗はいやだよ？」

「優勝旗です、よ！ 大洗女子学園隊長、西住みほどの旗を、立てときましよう、上に」

「優花里さんのものだ、よ！」

「へへ……ほんと、みほどののおかげですよ。私もう、ダメかと思つて」

「ダメ？」

「学園艦の中で遭難して死んじゃうのかなって」

「みほは足を止めて振り返る。優花里が汗だくの顔で笑っている。

「死ぬなんて」

「ありえないって思います？ みんなが普通に暮らしてる町のすぐ下で、道に迷って野垂れ死に、なんて。私もそんなばかな話はないって思うんですけど、人が死ぬときってそうですよ。日常のすぐそばにある見えない畏にはまって、コロッと死んじゃうんですよ」

「はあ、はあ、と息を荒くして優花里は笑っている。みほは一段戻って、コツンとその頭をグーで叩いた。

「変なこと言っちゃだめです！」

「あたっ！ はあい、ごめんなさい」

笑いながら二人は残りの十層を登っていった。

登り切ると視界が開けた。そこは噴水のある広場で、花壇とベンチが並び、店舗に囲まれていた。オーブンカフェやブティックの看板が出ている。

そこが栄えていたのは昔のことらしく、水盤と花壇は白く乾き、ベンチの木材はささくれ立ち、店のシャッターはすべて降りていた。打ち捨てられた封鎖ブロックの空虚な風景を、冬の午後の穏やかな日差しが、透明なアーケード天井越しに照らしていた。

みほが花壇の石を拾って投げ上げると、丈夫なポリカーボネイト材がぼこんと音を立てて跳ね返した。優花里が唇を震わせてつぶやく。

「そんな、な……」

「まだだよ、優花里さん！」みほがリュックを置き捨てて駆け出す。

「まだわからない、調べよう！」

り、押しでも蹴ってもへこみもせず、外へ上れるはずの通路も、隙間なくベニヤ板で閉ざされていた。天井は五メートルも上で、そこへ登る梯子はおろか、風取りの開閉機構を動かすクランク棒すらも見つからなかった。

要するにここでもまた、学園艦を管理する誰かが、地上の無邪気な子供が間違つて艦内へ迷い込まないように、完璧な手を打ったようだった。打ちひしがれたみほが戻ってくる、優花里は螺旋階段の手すりにつかまって下を覗きこんでいた。ハッとして「だめ！」と肩をひっぱると、振り返った優花里が、うつむいてぼそぼそと言った。

「……てなかつたんです」

「え？」

「階段の下。濡れてなかつたんです。ここが露天なら、きっと雨水が溜まってるはずなのに。おかしいなと思つたんですけど、見過ごしちゃいました。出られるかもしれないと思つて。あそこでみほどのを止めなきゃいけなかつたのに。それだけじゃなくて」

「さつと顔を上げた優花里が、噛みつくようにわめいた。

「道も間違えてました、ここ、貼り紙にあつたブロックじゃありません！ コンパスが逆だった、いえ、多分学園艦が夜のうちに向きを変えてたんです。そんな気はしたんですけど、言えませんでした。私のミスです！ ごめんなさい、みほどの、ごめんなさい……！」

優花里は顔を覆ってずるずるとくずおれてしまった。

みほは衝撃を受けてたたずんでいた。やがてフツと息を吐くと、自分のリュックに向かった。「仕方ない、降参しよう」。スマホを取り出す。

「助けを呼ぶね。私たち、もう限界だもの」

電源ボタンを押した。画面は黒いままだった。

「……え？」

長押しする。何も起こらない。背筋がひやりとした。

「優花里さん、電話は」

何かに耐えるように唇を噛みしめていた優花里が、はつと息を呑んでリュックに手を伸ばした。

「……バッテリー切れ、です」

「……そっか」

「昨日一日つけっぱなしでしたから——みほどの？」

スマホをリュックに戻すと、みほは優花里のそばへ行き、何か励ましの言葉をかけようとした。

何も思いつかなかつた。

代わりに頭に浮かんだのは、沙織の顔だった。麻子の顔、華の顔、学

園のみんなや戦車道の友人たちや、姉や母の顔だった。いつでも会えるはずだった親しい人たちの顔が、暗く遠ざかっていく。冷や汗がにじみ、膝の力がフツと抜けそうになる。

「ゆ、優花里さん——」みほは思わずしがみつく。「優花里さん、優花里さん！」

「みほどの——」恐怖は一瞬で伝わった。「み、みほどの！」真っ青になつた優花里が、もがくように抱きついてくる。

「うわあああん、ああああ……！」

子供のような泣き声が口からあふれ出した。

青かつた空がオレンジ色に染まり、紺色に代わり、星空へと姿を変えた。さらびやかな明かりを灯した学園艦の市街地から離れた、誰もいない放棄地区にある半地下の噴水広場にも、アーケード屋根を透かして星明りが降りそそいだ。

ベンチでびったりと寄り添っていた二つ人影の片方が、星に向かって手を掲げた。

「外、すぐそこなの——」

つぶやいた優花里の片腕が、しっかりと肩に回されている。彼女の腰を抱いて肩にもたれながら、みほはぼつりとささやく。

「ごめんね」

すると優花里が掲げた腕を下ろして頬に触れた。涙の匂いのする顔を寄せてキスする。

「私も、ごめんなさい。いっぱい間違えちゃいましたね、私たち」

かすかな光が、あきらめの漂う穏やかな笑顔を照らし出した。

「こんなことになってしまいましたけど、私、幸せでした。最期がみほどのと一緒に、よかつたです」

「……優花里さん」

甘い絶望に溺れかけていたみほの心に、その笑顔が、ちくりと刺さつた。

違うよ、そんなのは——そんなふうに言つてほしくない。そんなこと喜びたくない。

この人と交わしたいのは、こんな笑顔じゃない。この人が死ぬなんていやだ。もつともつと生きてほしい、この人と生きていたい。そうだ、私、なんでこんなことを受け入れてるんだらう？

「優花里さ——」立ち上がろうとしたとたんに、酷使した膝がズキンと痛んだ。その痛みが、かえって目の前に迫つた現実を思い出させた。

「優花里、さん！」

ふらふらの体に無理やり気力を込めて、みほはすつくと立ちあがる。不思議そうな顔の優花里を見下ろす。

「しっかりと、優花里さん！ 下へ降りるよ、もう一回！」

返事は、拒否だった。顔をくしゃくしゃにして、優花里がまたぼたぼたと涙をこぼし始めたのだ。

「そんなあ……無、無理ですよ。私、もう歩けません。もうやだ……」

「優花里さんッ！」

腕をひつつかんで立たせた。「いやあ……」と幼児のようにむずかる優花里を前にして、心を鬼にする。

パン！ と平手打ちした。何が起こつたのかわからないみたいに優花里が瞬きする。

「ばか！ 優花里さんのばか！ このまま死んじゃうなんてだめだよ！ 生きてよ！」

「み、みほどのこそ！」痛みで我に返つたのか、優花里が悲しげな顔で言い返す。「無茶言わないでくださいよ、また降りて登るなんて、できるわけじゃないじゃないですか！ 私たち、こんなにぼろぼろなんですよ。もう一度降りたつて、きつとまた道を間違えて、どこかの片隅で力尽きてしまふに決まっています！ それぐらいなら、いっそこで……！」

「そう、そうだよ——」はーつ、と深く息を吐いて、みほは静かに見つめる。「私たち二人とも、何度も間違えた。そのたびに、いいよいいよで済ませてきた。相手が好きだから。許したいって思ったから。お互いの間違いを受け入れるのが気持ちいいから、そうやってきて、そしてこんなどん詰まりまで来ちゃった。でもね、優花里さん！」

ぐいっつと両腕をつかんでにらみつける。

「私、いやだ！ 間違いつつで、許したつもりで、ダメダメとダメダメが仲良く手をつないだまま、あきらめて死んじゃうなんて、そんなの絶対いやだ！ 私は、優花里さんが間違えたら正したい、嫌いななら何も！ 優花里さんに、私が間違えたら叱つてほしい、絶対嫌われないから！ そうやって、本気で言い合える、もつと強い二人になりたい！」

どうなの？ 優花里さん！」

今まで見たこともないみほの激しい様子に、優花里は目を丸くして立ち尽くしていたが、最後に懇願するように強く揺さぶられると、ごくりと唾を飲み込んだ。

「みほどの……」

「ねえ！ 優花里さん——」

「ちよつと。放してください」

「……え？」

おそるおそるみほが手を放したとたん、優花里が自分の手で、ぶたれていない側の頬を、パン！と思ひ切りはたいた。ひゃっ？と身を引くみほの前で、ぶるるると濡れ犬のように頭を振る。

「うあー……いつて、首に来ました、強すぎたかな」

「……あの？」

「目が覚めました。私アホでした」自分の手のひらを見下ろしてから、真つ赤なほつぺたの優花里は、まっすぐにみほを見つめ返す。

「あなたのおっしやる通りです——みほどのにいてもらって、みほどのに許してもらったつもりで、みほどのを死なせてしまうなんて、とんでもないことでした。そんなの、絶対に——ぐぐつ、と拳を握り締めて優花里は絶叫した。「絶対絶対絶対、ゼー——ったいイヤです！みほどのには、なんとしてでも生きてもらいます！」

「優花里さん……！」

「行きましよう、みほどの！」

おなかの底から力を込めて、優花里が声を張り上げた。みほは目尻をぬぐって、しっかりとうなずく。

「行こう、優花里さん。絶対生きて帰ろう！」

「パンツァー・フォー！」

かたく両手を握り合って、二人は叫んだ。

それは、誰もが聞いたこともないほど過酷な旅路だった。五百メートルの降下に続く手探りの探検は、一再ならず袋小路に入りこんだ。崩れた天井や、開かない扉や、溜まった海水が二人の行く手をはばみ、さらなる迂回や引き返しを強いた。

みほと優花里は出発前に最後の水とカロリーメイトを食べ尽くし、余計な荷物をすべて捨てて、みほのリュックひとつに最低限の品を詰め込んで歩いてきたが、度重なる困難に、残り少ない体力と気力をじわじわと奪われ続けた。物言わぬ巨獣のような学園艦は、暗く深く入り組んだ腹の中をさまよう二人を、とことんまでいじめ抜くことに決めたかのようだった。

それでも二人は、もう決して絶望しなかった。地図を見たみほが「きつとこつちだよ」と進みかけたときには、優花里が「きつと？きつとじゃだめです、見せてください！」と決然と引き留めて、十五分も言い争い、みほの言い分の通りを選んで道が結局行き止まりだとわかって、自虐して落ち込んだり慰め合ったりはしなかった。「なんの間違ったのかな」「あつ、ここです。地図だここに細い道がもう一本あったんです。見逃しです」「そうか、向こうからくると見えない感じ

だね。注意して戻ろう」。

落ち着いて、冷静に——そして甘い見通しとお互いへの過信を許すこともせずに。自分の間違いを相手が見逃していないか考え抜き、相手の手抜きを自分が好意で許してしまっていないかを見つめ抜いて、これは二人が決定した最高の選択だと納得できる行動を、取り続けた。

間違いない地図にある脱出路だと確信できる道を、二人は見つけることができたが、そのころには本当に最後の力も失いつつあった。日付が変わるころ、第二六層の荒れ果てた通路で、二人は一度へたりこんだ。泣き言も、励ましすらも出て来ず、しばらく息だけを荒らげて休んでいたが、不意に優花里が叫んだ。「水です！」

手洗い場があり、水道があった。二人はよろよろと近づいて蛇口をひねり、ほとばしる水を交互に一口ずつ飲んだが、そこで水は止まってしまった。元栓が締めてあるのだろう。

そこで優花里が、リュックの底でペしゃんこになっていた宝物を取り出した。

「お握り……」

「昨日の、いえ、もうおとついでですけどね」

食べ残しのおかか握り。半分こして、むさぼるように食べた。

「むぐつ、んむ……おいしいですか？」

「へんな匂いがする」みほが泣き笑いの顔で答える。「優花里さん、これいたんです」

「ほんとだ。へへ、なんなら私でもらっちゃいましょうか」

「だーめ！絶対あげない！」

まるで取っておきのごちそうみたいに、二人は最後の食料をたいらげた。

最後の二百五十メートルの階段、東京タワーの高層展望台にも匹敵する高さを、二人は文字通り手と足を使って、這いずりながら登り切った。終点は鉄扉だった。優花里がドアノブに手をかけ、感電したようにひっこめた。おびえた顔で振り向く。みほがぐつとあごに力を入れてうなずき、優花里の手を取った。

そして二人で、ドアノブを握った。

それはあつなく回った。ギギイ、とドアが動く。薄明りと冷たい風が差し込む。二人は顔を輝かせる。

「みほどの！」

「うん！」

一気に押し開けて、折り重なるようにして外へ倒れこんだ。

明け方の群青色の空が開けた。四角い空が。威圧的なコンクリートの壁が四方にそびえている。

「は、はは……」

優花里の汗と埃で汚れた顔に、うつろな笑いが浮かぶ。  
そこは市街地の排水溝の端にある、集水マスの底だった。

「優花里さん、肩車できる？」

みほが表情を消したままで言った。優花里はうなずいて、みほを首にまたがらせる。

それからしばらく、いろいろなことを試した。肩車、肩に立たせる、そこからさらにジャンプさせる——落ちてきたみほをあわてて抱き留めた。壁は四メートルぐらいあって、跳躍力のあるみほでも届かなかった。入れ替わって優花里が上になってみたが、やはり届かず、しかも落ちるときに壁で膝をこすって擦り傷を作った。

それから大声で人を呼んでみたが、二十分ほど続けても誰も来なかった。朝が早すぎるせいかもしれないが、それにしても車の音すらもせず、じきに声が嘎れてしまった。

二人がいる横手にはここから水を抜く土管が黒く口を開けているが、鉄柵がはまっている。こんなところに階段の出口を作るなんて、と思っただが、錆びついた鉄梯子の残骸が隅に落ちているのに気付いた。昔はそれで穴の上に出ることができたのだろう。

「思い出しました。ここはきつと学園艦の艦尾近くです。廃屋しかない地区ですよ」

「……雨が降ってないのは、よかつたね」

みほが言ったが、明らかにそれ以外に何もいいことがない、という意味だった。

「はー……」

二人はごろりと横たわった。手をつなぐ。あたりにはごみ混じりの乾いた泥が積もっていて、顔はどろどろ、服も髪もぐしゃぐしゃ、けがと疲れと筋肉痛で、満身創痍だ。

それでも、噴水の広場にいたときより、ずっといい気分だった。

「私たち、全力を尽くしたよね」

「はい。やり抜きました」

「はー……」

「改めて、言うね。一緒にいるのが優花里さんでよかった。そうじゃなきゃ、ここまでがんばれなかったよ。ありがとうね」

「そんな、私こそ……」すべてのこだわりが抜けた後の、混じり気のない感謝の言葉を受けて、優花里はくしゃくしゃと髪をかき回したが、ふと真顔になった。

「最後にひとつ、やらせてもらえませんか」

「え？」

起き上がったって左腕をぐっぐつと屈伸させる。

「装填手の秋山です——実力、見せちゃつていいですか？」

「いい、これ、手首大丈夫？」

「はい、軽いもんです」

しゃがんだ姿勢で左手を肩の上に構え、手首を右手でぎゅつと補強する。その左の手のひらでスニーカーの靴底を支えている。上にみほをしゃがませているのだ。いくら軽いと言っても、ずっしりと肩に来る。「なんならぶつ壊れちゃつてもかまいません！ 全力で跳んでください！」

「わかつた——信じるね」

体に残った力を最後の一滴まで、足腰のばねに溜める。腰から上の動きは、四号戦車でいやというほど繰り返しているのと同じだ。舌なめずりして、優花里は叫んだ。

「行きますよ。みほどの、後はお任せします！」

「うん！」

「でええええいっ!!」

膝、太腿、腰、背筋。全身の筋肉を爆発させて優花里は立ち上がった。左手の重み、この世の何よりも大事なものを、自由な世界へ向けてぶち上げる。

ぐん！ と反動を残してみほが跳んだ。

「ふわあああああつ!!」

可愛い悲鳴が空へ突き抜け、見上げた目に、朝日の一閃に照らされた、みほの白いパンツが映った。どしんごろごろ、と壁の上で無様な音がした。

すぐに向きを変えたみほが覗きこむ。

「上がれた！ 優花里さん、上がれたよ！ ありがとう!! 大好き、世界で一番大好きー!!」

「私もめちゃくちゃ大好きですよー!!」

「待ってて、すぐに助けを呼んでくるからね！」

ぐつ、と優花里は親指を立てる。そして大の字にひっくり返った。